

みやけの風

第 223 号

平成17年(2005年)5月21日(土)発行
発行：三宅島災害・東京ボランティア支援センター
発行責任者：上原 泰男
東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ 10階
東京ボランティア・市民活動センター気付
TEL：03-3260-7573 FAX：03-5229-1646
E-mail：tokyocenter@cmppo.org

島では、ウツギの花が咲き、昨日からホトトギスが鳴き始めたそうです。風も吹き、すっかり夏を感じさせるようになってきたとのこと。東京では、毎日暑かったり、寒かったり。お互い気をつけて、過ごしたいですね。

みんなの声

まるでお祭り騒ぎのような三ヶ月

三月になると、磯の釣り場のあちこちに、釣り人の影が目につき始めた。しばらくして、夕方になるとやってきた、メジナ達。

「おお、今日は刺身になるか。」

数日後、またやって来て、

「あんれ、今夜はフライになってみるか。」

そして、またまたやって来て、

「う～ん、今夜は空揚げでいいか。」



山の物が食べたくなくて、かみさんと竹山に出かけたが、まるで無かった。それどころではない、先に誰かに入られているようだった。

かみさんの実家の土地だから、俺たちに不正はない。

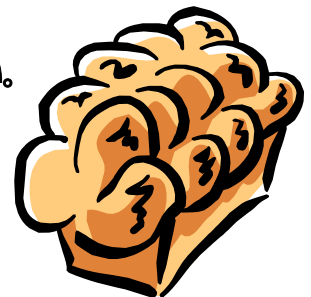
数日後、また出かけた。また、まるで無かった。

俺たちはパンを作っているせいで、午前中にそんな時間の余裕など無い。

次の休日、早く出かけた。小山ほども取れた。

天ぷら、味噌汁、卵とじ。

「う～ん、また天ぷらにするか。」



他にも、飛び魚、マスコミ達が連日やって来た。

うちのパン達と言えば、東京に、御蔵島に、神津島に連れて行かれて大変だったようだ。

そんな、なんだかんだで、もう三ヶ月経とうとしている。

それまで人の気配が無かった家も、雨戸が開き、中から話し声が聞こえ始めてきた。

しかし、元の家主が戻ってはいない家が意外と多いのに気付いた。

自身の体の健康のこと、子供の教育のこと、仕事のこと、
そしてもちろん高濃度地区に指定されたことで・・・。

そんな境遇の人達がまだ千人もいると言うのに、
この島では、まるでお祭り騒ぎのような三ヶ月だった。

「全島避難解除」というお祭りの。

今、少し、恥ずかしい気がしている。

(坪田 築穴 一也)

本格帰島して20日になります

三池港に到着した4月28日、日の出直後の真っ赤な太陽を背に、白い月は西の上空に、緑の朽ちた島なのに、ウグイスのさえずりで迎えられました。

5年近くも待つて得られるよろこびや感動は言語に尽くせません。引越し荷物の整理は、ぼちぼち。時には四つんばいになって、そうだ、ボランティアセンターに依頼しようと電話すると、翌日4人の赤帽さんが見えました。

家具を2Fの部屋へ移動をお願いすると、「せいの、せいの」と掛け声をかけながら、上手に傷をつけずにあっという間でした。「また、いつでも声をかけて下さい」と笑顔であいさつ。

三宅島島民は、避難生活中も東京のボランティアの方々にふれあい集会などでお世話に

なりました。今こうして帰島はしてみたものの、荒れ果てた室内、敷地の様子にがっくりきたり、体調を崩したりする人もいます。

でも、あたたかいご支援に接して、とても励まされ教訓にもなっていることでしょう。

火の島の宿命を背負って、一步一步みんなと力をあわせて、島の暮らしを楽しめるよう努力しまあす。

(阿古 佐々木 美代子)



< 現地センターから >

今朝は、夕べからの雨は上がり、これからは晴れるようですが、ナガシの風が強く吹いていて、木々もピューッと吹かれています。入梅を前にあちらこちらで木苺が色づいて、きれいなオレンジ色の実をたくさんつけているのが目を引きまます。

今週は、帰島の時期がもう少し先になる方々の一時帰宅が目立ちました。数泊の滞在期間でお帰りになった方々のお宅へお手伝いに行きました。お宅の周りの草を刈ったり、少しづつ送られた荷物を整理したりとお手伝いをしながら、お宅の方と一緒に過ごす中でいろいろなお話を伺いました。噴火当時の事や避難生活での出来事などもお伺いしましたが、久しぶりに帰ったご自宅を前にして、噴火以前の暮らしやご家族の中の思い出話もたくさん伺いました。懐かしさから涙を浮かべてお話になる方もおられ、長く続いた避難生活や島への強い思いを強く感じる事ができました。

センターは、本当に長くそして大変な時期を過ごされてきた皆さんの、新しい一歩を、精一杯お手伝いしながら、引き続き一緒にさせていただきます。

三宅島支援センター 現地事務局より (5月19日 木曜日)